

## 3歳児と自然のかかわり (2)

－保育者のかかわり方を中心に－

斎藤 健司<sup>1)</sup>\*・友光 有子<sup>2)</sup>・高月 教恵<sup>1)</sup>

1) 新見公立短期大学幼児教育学科 2) 矢掛町保健福祉課

(2017年12月20日受理)

近年は、子どもが遊ぶ場所や体験をする場所が身近な所に少なくなり、自然体験や社会体験を日常的に積み重ねる機会が減少している。そのため、子どもが、自然の不思議さを感じたり、実物の感触を確かめたり、体験して感じる情報やその周辺情報などを得たりすることが難しくなっている。保育者には、自然とのかかわりの機会を増やし、効果的に子どもの成長を促すことが求められている。

本研究では、3歳児と自然とのかかわりについて、担任保育者の1年間にわたる保育実践記録を基にして分析を行い、保育者のかかわり方について考察をした。観察対象児は、動植物や他者をいたわったり大切にしたりすることが出来ていたのに出来なくなったり、別の機会ではまた出来るようになったりしていた。1年間を通して、人や動植物をいたわる気持ちと自分の好奇心を優先したい気持ちが混在する姿が何度も観察された。保育者は、人や動植物への接し方を長期間にわたり何度も知らせることで、やさしさや思いやりの姿勢を育てようとしていた。

(キーワード) 乳幼児、保育内容「環境」、領域指導法

### 1. はじめに

新しい幼稚園教育要領、保育所保育指針、ならびに幼保連携型認定こども園教育・保育要領が2018年度から施行される。幼稚園教育要領では、育みたい資質・能力として「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱が掲げられる。今回の改訂では、特に「学びに向かう力・人間性等」の育成を重視している。これまでも「自分の気持ちを調整する力」や「粘り強く取り組んだり挑戦したりする力」や「仲間と協調する力」といった非認知能力を育てる保育は重視されてきた。しかし、エビデンスを示すことが難しいため、遊びを通してこれらを学ばせる保育の形が社会的に理解されているとは言えない状況であった。近年、子どもの遊びの重要性についてデータで裏付けされ始めた(Heckman 2001, Bowles 2001, ベネッセ教育総合研究所 2016)。そのため、保育者はこれまで積み上げてきたいくつかの実践に根拠をもって取り組むことができるようになった。今回の改訂により、非認知能力を育てる保育者のかかわり方が社会に理解され始めると考える。そのためにも、実践研究からより良い保育の方法を導き出すことが改めて重要となっている。

筆者らは先の研究で、子どもと自然とのかかわりについて、保育者が自然に対して興味関心を持ち、主体的に環境

を整え、積極的に子どもとともに自然に関わることが重要であると考察した(斎藤ら 2017a, 2017b)。保育者が十分な環境構成を整えることで、子どもは自然への興味関心を抱き、自然と関わって遊ぶ楽しさを味わい、思いやる心や感動する心の育ちにつながっていた。先の研究では、考えや行動の中に「心情・意欲・態度」などの非認知能力が表れやすい5歳児を対象にした(斎藤ら 2017a, 2017b)。本研究では、出来ることと出来ないことが混ざりながら成長する時期の3歳児に焦点を当てた。3歳児と自然とのかかわりについて、担任保育者の1年間にわたる保育実践記録を基にして分析を行い、そこで行われたやり取りを整理することにより、保育者のかかわり方について考察を行った。調査対象は3歳児とした。保育者のかかわり方について、保育者とC男とのかかわり、保育者と3歳児クラス全体とのかかわりの2つにカテゴリーを分けて考察を行った。

### 2. 方法

#### 1) 観察方法

観察対象の子どもは、岡山県のA保育園(0、1歳児混合クラス14名、2歳児クラス9名、3歳児クラス16名、4歳児クラス16名、5歳児クラス18名、園児総数73名、職員14名)の3歳児クラスのC男(6月20日生)である。本稿では、男児を○男、女児を○子と表記した。観察は、C男と3歳児クラス

\*連絡先: 斎藤健司 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

の子どもたちの様子を、自然とのかかわりを中心に記録した。記録は、C男の保育者（担任：筆者の友光）が園で共に生活する中で平成12年4月から1年間の行動観察を実施して記録した。この期間中、毎月1回、筆者の高月と岡山県井笠管内三郡13保育園の代表保育士（観察者を含む）で研究会を開催し、観察記録に基づいて検討を行い、子どもの育ちと保育者のかかわり（環境構成等）について記録を整理した。

## 2) 倫理的配慮

調査対象者および保護者には、文章および口頭で、研究の趣旨、記録と公表の方法、個人情報保護の説明し、調査への参加は任意であり、不参加によって不利益を受けないこと、観察記録を報告書や論文等として公表することはあるが、個人が特定、推測されるような可能性がある方法で公表することはしないことを伝え、口頭で同意を得て調査を行った。

本稿では個人が特定されることがないように園児名のアルファベットはランダムにつけて表記している。

## 3. 結果と考察

### (1) 4月当初のC男の姿

C男（3歳10ヶ月）は、父（38歳）・母（31歳）・兄（7歳）、兄（5歳）、祖母（69歳）の5人家族である。母親は外国生まれである。父、祖母とも病弱で通院している。二人の兄の影響で、カエルととう虫ダンゴムシカタツムリ等の小動物を見つけたり触ったりすることが好きである。

C男は進級当初(4月)、物怖じしないので何にでも積極的に関わろうとする。しかし、調子に乗りやすく、集まりなどの規則が守れないことがある。また、ふざけていることを注意すると、ふてたように横を向いたり、「だだ」と意味不明の言葉を言って聞こうとしないことがあったりする。生き物に対して強い興味を持っている。また鋭い観察力も持っている。

### (2) C男の1年間の育ち

C男の1年間の育ちを表1に示す。表1から次のような様子が伺える。4月はチューリップが咲いていることを保育者に知らせ、花が散ると「あーあ」と言って残念がる様子がうかがえる。5月は、プランターや鉢を動かしながらヒメヤスデ、ダンゴムシ、ナメクジを見つけて手に持って周囲に見せて満足している。6月は、カタツムリを見て「おとうさんとおかあさんじゃけえ、おきとる。あかちゃんはねとるで」と擬人化したり、霧吹きで水をかけたりして親しみをもちながらカタツムリに接している。しかし、ケースの内側を上がってくるカタツムリを見て「キャー」と言ったり、保育者がカタツムリに触れるように誘うと、「きもちわるい」と言って笑いながら後ずさりをしたりしている。7月

は、見つけたバッタのしっぽに針があったことから、「おとうさん」という名前をつけた。名前の理由として、「こわいから」と答えている。8月は、カメに積極的に名前をつけたり水をかけたりしている。また、煮干しをあけて観察したり、食べたかどうか翌朝確認したりしている。9月は、フウセンカズラの種を取り、いったん保育者の手のひらにのせるが、また自分のポケットに入れており、フウセンカズラの種に対する強い興味を感じられる。10月は、カメにシャワーをかけてあげるなど思いやりのある行動も見られるが、何回もひっくり返して手足をばたばたさせて楽しむなど自己中心的な行動もしている。カメに対する思いやりよりも自分の好奇心の方が高くなっている様子が伺える。また、ドングリを並べて遊んでいる時に、「Aちゃんのところまでいったで。ひつついたなあ」と言い、「なかよしで。どんぐりさんが。」と言って喜んでいる。11月は、銀杏の木を揺らして落ちてくる葉を見て「わあ、あめじゃ」と喜んだり、落ちた銀杏を見て「イチゴじゃが。あかいけえ」と答えたり、においをかいで「くせえ」と言ったり、食べてみて「おいしい」「おもちみたい」と言ったりして、自然を五感で強く感じている。12月は、園外保育に行きミノムシ取りをする。C男は保育者が誘ったことでミノムシに興味を持つ。1月には、自分の家の気にミノムシがいることを保育者や友人に伝えミノムシ取りに誘う。ミノムシの死を知ると、「つちにうめてやる」と言って叩いている。2月にミノムシを見つけた時に、1月のミノムシの死を思い出し、今回取ったミノムシはミノをはさみで切らないようにして飼おうと保育者に提案している。3月は、プランターの土から冬眠中のカエルを見つけて持ち歩くが、保育者に土に戻すように注意されるとしばらくして土に戻している。しかし、次の日にまたカエルを土の中から掘り出して持ち歩いている。C男は、生き物へのいたわりと生き物への好奇心が混在している。

### (3) C男に対する保育者のかかわり

保育者はC男に寄り添いながら、一緒に共感したり行動したり見守ったりしている。チューリップの花びらが散ったのを見てC男が「あーあ」と残念がった時は、「チューリップの花びらが散ったね」と言って共感をしている。園外保育で銀杏の木を揺らして葉を落とした時にC男が「まだしてえ。わあ、あめじゃ」「きれい」と言ったことを聞いて、「葉っぱが雨みたいに降ってきたなあ。きれい」とC男の気持ちを受け止めている。カタツムリの世話をしている時には、「持ってみる?」と言ってC男の手にカタツムリをのせて感触を伝えている。バッタに針があるのを見つけて怖がった時は、「痛くないじゃろう」と言いながらバッタを手を持って見せて安心させている。ミノムシの殻を切り取ったために死なせてしまったとの思いから、新しく見つけたミノムシに対して「きらんですか?」と言ったC男に

は、「うん。みのむしはそのままそっとしてあげよう」と気持ちを受け入れている。このように、保育者は園外保育に誘ったり、自然物を使って環境構成をしたりしながらC男の興味を見取り、寄り添ったり共感したりしている。C男の興味関心は、このような保育者のかかわりで育ったと考えられる。

C男は、生き物に対して強い興味を持っており、また鋭い観察力も持っている。反面、自分の欲求を優先してしまい、規則を守らなかったり周囲に迷惑をかけたりすることもある。保育者はC男を見守りつつ、行き過ぎた行動をした時は必要に応じて注意をしている。カタツムリに霧吹きでかけた水量が多くなった時は「もう雨がいっぱい、カタツムリはいらなくて言うよ」と伝えている。うさぎのえさやりでC男とM子が押し合った時は「うさぎさんたべる？」と2人に声をかけ、押し合うのをやめさせている。また、カメを何回もひっくり返して遊んでいる時は「カメさんは後ろ泳ぎするのは嫌だって言うよ」と言って注意をしている。冬眠中のカエルを持ち歩くC男には「春になってきたけど、もう少し土の中で寝たいって言うよ」と土の中に入れてやるように促している。他者をいたわる気持ちと自分の好奇心を優先したい気持ちが混在しているC男に対しては、保育者が適切なタイミングと接し方で動植物とのかかわり方を伝えている。

以上より、保育者がC男に対して、自然にかかわるきっかけづくりをしたり、一緒に遊んだり、食べたり、共感したりすることで、C男は感動し、好奇心も高まり、思いやりの心や行動の目的意識も育ったと考える。

#### （4）3歳児クラスに対する保育者のかかわり

保育者は、園生活の中で子どもたちが周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわりやすいように環境を設定していた。チューリップに対する興味を高めるために、子どもたちに写真を見せたり、チューリップの形を手で作ったり、チューリップがよく見えるようにテラス前にプランターを移動させたりしている。子どもたちがチューリップに興味をもつと、白いチューリップの形の画用紙とクレパスを用意して、色塗りをして子どもたちとホールの掲示板に張っている。カタツムリの餌を替える時は、「これなんじゃろう」と言いカタツムリのうんちを指さして問いかけ、餌とうんちの関係を考えさせている。フウセンカズラの様子を見に行った時は、緑色の袋と茶色の袋の中の種を比較させ、「赤ちゃんは小さいから、もうすこしおいてあげよう」「そうじゃなあ。茶色の袋になったらお父さんになるかなあ」と言って植物の生長について気づかせようとしている。園外保育で近くのドングリ山へ行った時は、「たくさん拾ったね。みんなどれくらいあるかな？」と言って並べてみるように誘っている。また、積み木やダンボール板を用意して、ドングリを転がす遊びに展開させて

ている。イチヨウの葉を拾いに行ったら偶然見つけた銀杏については、保育者はどうやったら皮が取れるか、事前に聞いたり調べたりしている。銀杏を子ども達と一緒に土の中に埋め、また掘り起こし、皮を取って乾かし、一緒に食べながら、保育者は子どもたちの好奇心や探究心が高まるように導いていた。秋のミノムシが見つかる頃は、子ども達が興味を持つようにミノムシ取りに誘い、ミノムシが毛糸や色紙の殻を作るように環境を整えている。

保育者は、子ども達が十分に自然に触れたり、動植物の生態や命を感じたり出来るように、1年間を通して物的、心的“環境構成”を整えていた。さらに、保育者は常に子どもに寄り添い、共感したり見守ったり援助したりしながら一緒に生活をして子どもを導いていた。

#### （5）おわりに

C男は、動植物を大切にすることが出来ていたのに出来なくなったり、別の機会ではまた出来るようになったりしている。ミノムシの命を気にする時もあるれば、カメを水の中で何度もひっくり返して遊ぶ時もある。このような相反する行動が混在しているのが3歳児のC男の特徴である。保育者は、C男に動植物への接し方や扱い方を知らせることで、気持ちのバランスの整え方を伝えようとしている。長期間にわたる保育者のかかわりにより、C男に動植物の命の概念が芽生え、動植物に対するやさしさや思いやりの姿勢が育ち始めている。

#### 謝辞

この研究は、岡山県井笠管内三郡保育協議会の13園の代表保育士とともに5年にわたり「心が育ち合う保育をめざして―自然とのかかわりを通して―」について研究したものを資料としている。この研究にあたり、ご協力いただきました岡山県井笠管内三郡保育協議会の先生方に厚く御礼申し上げます。

#### 文献

- 1) 斎藤 健司, 鈴木恭子, 高月 教恵 (2017a). 5歳児と自然のかかわり(1), 新見公立大学紀要, 38(1), 13-18
- 2) 斎藤 健司, 鈴木恭子, 高月 教恵 (2017b). 5歳児と自然のかかわり(2)～保育者のかかわり方を中心に～, 新見公立大学紀要, 38(1), 19-23
- 3) ベネッセ教育総合研究所, 「園での経験と幼児の成長に関する調査」, ベネッセ教育総合研究所, 2016
- 4) Bowles, S., Gintis, H., & Osborne, M. (2001). The determinants of earnings: A behavioral approach. *Journal of economic literature*, 1137-1176.
- 5) Heckman, J. J., & Rubinstein, Y. (2001). The

importance of noncognitive skills: Lessons from the  
GED testing program. American Economic Review,  
145-149.,

表 1 3 歳児 C 男の一年間の育ちと保育者のかかわり

	C 男の姿	保育者のかかわり
4 月	<p>子どもたち全員で、チューリップの形を手で作り、チューリップの歌を口ずさんだ。</p> <p>C 男は「うん、あるよ、あっちに」と言っ、チューリップの場所を知っていることを保育者に伝える。</p> <p>S 子の「せんせいきて」という声を聞いて、C 男も保育者とともにチューリップを見に行く。C 男は「あー。さいとる。チューリップが。こんなになつとる。きれい」と言っ、手でチューリップの花の形をまねる。</p> <p>M 子や R 子が白い画用紙のチューリップに色を塗っている。I 子・T 子・A 子・Y 子・S 男・T 子がやってきて色を塗る。C 男は青いクレパスで青いチューリップを作る。</p> <p>後日、チューリップの花びらが散っていたのを見て、C 男は「あーあ」と言い、保育者の方を見る。</p>	<p>降園前にチューリップの写真が載っている月刊誌を見せて「こんなに開いているなあ」と手でチューリップの形を作ってみせる。</p> <p>3 月 31 日に園舎を引っ越してきたので、「チューリップも一緒に引っ越してきたなあ。どこにあるか知っている？」と尋ね、見つけたら保育者に知らせてほしいと話す。</p> <p>次の日、チューリップが良く見えるようにテラスの前にプランターを移動しておく。</p> <p>「ほんとに咲いたなあ。きれいなあ」と共感する。降園時、チューリップが咲いたのを保育者に知らせてくれた S 子にお礼を言い、いろいろな色のチューリップを作ろうと話しかける。</p> <p>チューリップが見えるテラスに机を出し、白いチューリップの形の画用紙とクレパスを用意しておく。色を塗ったチューリップを子どもたちとホルの掲示板に張る。降園前、みんなに飾ったことを伝える。</p> <p>「チューリップの花びらが散ったね」といって共感する。</p>
5 月	<p>C 男は「おらんあ」と言いながら、プランターを動かして何かを探している。</p> <p>C 男は保育者の言葉には答えず、「おった、でもねている」と虫を見つめる。「おきて」とつつきながら虫に話しかける。長くなって動き出す虫を見て「おきた。あるきよう」と喜ぶ。</p> <p>Y 男が「これはなに？」と尋ねると、C 男は「ムカデの赤ちゃん」と答える。</p> <p>C 男は「くちじゃ」と言う。手にヒメヤスデを持ったまま、また鉢を動かして虫を探す。</p> <p>C 男はダンゴムシを見つけ、Y 男・S 子に見せる。ダンゴムシを見た S 子・Y 男と一緒に虫を探す。</p> <p>C 男はさらにナメクジを見つけ「おった。これ。かたつむりのあかちゃんのなめくじじゃ。」と言い大事そうに持つ。</p> <p>C 男はヒメヤスデ・ダンゴムシ・ナメクジの三つの虫を手を持ち、Y 男・S 子・保育者に見せる。Y 男に「すげえ」とびっくりしたような顔で言われて、C 男はにっこりと笑う。</p>	<p>何を探しているのか尋ねる。</p> <p>見守る。</p> <p>「虫はヒメヤスデというんよ」と知らせ、C 男にどこがかわいか尋ねる。</p> <p>見守る。</p>
6 月	<p>テラスのパンジーの花の上にいるテントウムシを R 子・M 子・H 子・Y 男が見ている。</p> <p>花の上にいるテントウムシが下に落ち、見えなくなったので、C 男が「さがそうや」と言う。</p> <p>C 男はテントウムシの本を保育</p>	<p>「みんな何見ているの？」と聞くと、R 子が「これテントウムシ」と指さして言ったので、「どこ？」と聞く。</p>
7 月	<p>室からテラスへもってきて、R 子・M 子・H 子・Y 男・保育者と一緒に見る。</p> <p>C 男はテントウムシの幼虫がフェンスの外にいるのを見つける。そして、フェンスの外でテントウムシや幼虫を捕まえる。幼虫やテントウムシを園に持って帰る。</p> <p>ケースにテントウムシや幼虫を入れて、C 男は R 子・M 子・Y 男と一緒に見る。</p> <p>近くのケース (18.5×34×19cm) のカタツムリを C 男は M 子・H 子・S 男・Y 男・R 子と一緒に見ている。ケースの内側を上がっているカタツムリを見て「あがりようで」「おとうさんとおかあさんじゃけえ、おきとる。あかちゃんはねとるで」と言う。C 男は「ぼくもしたい」と霧吹きを使いたがるが、我慢して順番を待つて使う。「わあ！たいへんだ」とカタツムリが動き出すのを見て、余計に水をかける。</p> <p>小さいカタツムリが角を伸ばして動かしているのを見て C 男は「わあ！」と言う。C 男は「きもちわるい」と言っ、笑いながら後ずさりをする。</p> <p>C 男は Z 子・K 子・A 子・Y 男・M 子と一緒にケースの中のカタツムリを見る。</p> <p>Y 男が「うんこじゃ」と言い、H 子は「きたねえなあ」と言う。</p> <p>C 男は「これたべたんじゃ」とケース内のキュウリを指さす。保育者がケースから取り出したキュウリを見て「やっぱりたべたんじゃ」と確認する。</p> <p>C 男は自分で 5 歳児の部屋に行き、霧吹きを借りてきてカタツムリに霧吹きで水をかける。</p> <p>C 男は友だちに霧吹きを貸してあげる。C 男は「キャー」と言いながらケースの内側を上がっているカタツムリを下におろす。</p> <p>C 男は「だまってみてみい」と怒って言う。</p> <p>C 男はちょっと見てすぐ自分の手に乗せているカタツムリをケースの中に置く。「てをあらわんといけん。あらいねえ。」と M 子に言う。</p>	<p>「テントウムシはいるのかな。探しに行こう」と誘う。そしてフェンス沿いにテントウムシと一緒に探しに行く。</p> <p>ケース (18.5×34×19cm) を出す。見守る。</p> <p>「ねてるなあ」と共感する。カタツムリの殻から体が出てくるように霧吹きで水をかける。見守る。</p> <p>霧吹きでかけた水量が多くなったので、「もう雨がいっぱい、カタツムリはいらんで言ってるよ」と知らせる。</p> <p>「持ってみる？」とカタツムリに触れるように誘う。</p> <p>カタツムリの餌を替えるため、ケースをテラスに出す。「これなんじゃろう」とカタツムリのうんちを指さして問いかける。</p> <p>「このキュウリを見て。こんなになつとるよ」と中から表面がかじられたキュウリを取り出してみせる。</p> <p>カタツムリのケースの中の土が乾いているので霧吹きで水をかけよう誘う。</p> <p>「順番に使おう」と言う。</p> <p>見守る。</p> <p>M 子が大きいカタツムリを手に乗せているのを見て、「C 男君も大きいのをのせれる？」と言っ、C 男の手にそっとカタツムリをのせる。</p> <p>M 子のカタツムリの目が出ているのを見て、「C 男君も見えてごらん」とみるように誘う。</p> <p>見守る。</p> <p>朝、保護者からもらったサツマイモの芋づるを C 男・N 男・M 子・Y 男・T 子に見せる。</p> <p>見守る。</p> <p>C 男と M 子がウサギの前で押し合うので、「うさぎさんたべる？」と C 男と M 子に声をかけ、</p>



	<p>C男は「たべん」と言って、イモを持ったままウサギのサークルから10メートル離れているままとコーナーに行き、おろし器を出してサツマイモをするうとする。</p> <p>C男は「うん」「あのなあ」と言いかけて芋をするが、なかなかすれなくてその場を立ち去る。</p> <p>テラスの天井にバッタがいるのをS男が見つけたのでC男は見に行く。4歳児のK男・Y男・S男が帽子を投げて天井のバッタを落とそうとすることを見ている。自分のところに落ちた帽子をK男に差し出す。</p> <p>C男は遠くからバッタを見ていて、しっぽに針があることに気づき、そばにいる保育者に知らせる。</p> <p>4歳児が帽子を投げるのを見て、自分のところに落ちた帽子を投げる。</p> <p>保育者にバッタの名前を聞かれたC男は「おとうさん」と答える。</p> <p>保育者に名前を理由を聞かれるとC男は「こわいから」と答える。</p> <p>C男は天井から落ちてきたバッタの触角を触る。針があつて怖いことを友達に話す。</p> <p>C男は笹でバッタに触り、「R子ちゃんも触ったん？」とR子に聞く。</p>	<p>押し合うのをやめさせる。</p> <p>「お芋をするん？」「だれにあげるん？」と尋ねる。</p> <p>一緒にバッタを見に行く。</p> <p>一緒に見る。 バッタの名前を聞く。</p> <p>「どうして？」と聞く。</p> <p>「痛くないじゃろう」とバッタを手を持ってみせる。</p>
8月	<p>Y男は汚いことを認め、C男はそれがうんちだという。Y男・S男・A子と一緒に水替えを手伝う。</p> <p>C男は「かめじろうがええ」と言い、S男も賛成し、その場で「かめじろう」と決める。「かめじろう」と名前を呼びながら、カメをタライから出したり入れたりする。</p> <p>C男はカメにシャワーをかけながら「きもちええじゃろう」と言う。</p> <p>C男は「たべるものをやろうよ」と言い、煮干をやる。S男は食べないことを心配そうに見ているが、C男は「たべたべ」と言う。</p> <p>翌朝、C男は登園してすぐにカメのところにいき、「あ、たべとるよ」と言う。</p>	<p>カメの水が汚いことを気付かせ、水をきれいにしあげようと誘う。</p> <p>「このカメ、名前はなんていったらいいかな？」と聞く。</p> <p>きれいになったことを一緒に喜ぶ。「昨日はお休みだったから、おなががすいてるよ。」とえさをやることに気づかせる。</p> <p>「今、食べたくないのかなあ」と言う。</p>
9月	<p>C男はH子・A子・H男・R子・M子・S男と一緒にフウセンカズラの周りに行く。H子「たねはくろで」H男「こっちは3こあるで」と言うのを聞きながら、黙って座り込んで茶色の袋を破り「あ！あつた」と言う。</p> <p>S男は緑色の袋を破って「これあかちゃんて」と言ったのでC男は「ほんとちいさい」と言う。「おとうさんになったらええ？」と聞く。</p> <p>C男は、たくさんのフウセンカズラの種をいったん保育者の手の</p>	<p>外の遊具の片付けにクラスみんなで出た機会をとらえて、フウセンカズラの様子を見に行く。</p> <p>「赤ちゃんは小さいから、もうすこしおいてあげよう」と言う。</p> <p>「そうじゃなあ。茶色の袋になったらお父さんになるかなあ」と答える。</p> <p>C男の気持ちを受け止め、保育</p>
	<p>ひらにのせるが、また自分のポケットに入れる。</p>	<p>室に入ってフウセンカズラを入れるピンを出す。</p>
10月	<p>C男はケース（18.5×34×19cm）の中のコオロギをじっと見ながら「たべんなあ」「ぼくはきのうたべたんで。おいしいで」「ぼつたのうしろでコオロギがじっとみるから、こわいこわいいいよるで」と言う。</p> <p>C男は観察台の栗を持ってきてコオロギのケースに入れ、コオロギが栗に近づくのをととても喜ぶ。ナスを食べるのを見る。</p> <p>C男は、K男のまねをして、カメをひっくり返して「カメさんうしろおぎしようる」と、手足をばたばたしているのを見る。</p> <p>C男は保育者の言葉を聞かない。カメが自力で元に戻ると、またひっくり返してみている。</p> <p>C男は園に帰るとすぐ、ホールの床に工夫しながらドングリを並べようとする。</p> <p>C男は「Aちゃんのところまでいったで。ひつついたなあ」と言い、ホールの床にある線の上に並べる。</p> <p>C男はそれを見て、「すげえ」「どんぐりがながいで」と言う。A子に「なかよしで。どんぐりさんが」と言って喜ぶ。</p> <p>C男はK男・M子・R子・H子と一緒にホールの段ボールとドングリを見つける。</p> <p>C男は「わかった！ドングリをころがすんじゃ」とドングリを手ですくって、段ボールの上で手を離して、ドングリを転がす。ドングリがホールいっぱい転がっていくのを「キャー、キャー」と歓声をあげて喜ぶ。「ようころころするで」と何回もする。C男・R子・K男・M子は競ってドングリを転がす。C男はK男の真似をして段ボールの上に上がり座る。C男が降りてK男も降りる。</p>	<p>「食べるかなあ」と言いながら、ナスを切ってケースの中のコオロギにやる。</p> <p>見守る。</p> <p>カメの水替えをするために、タライの水を捨て、カメの甲羅にシャワーをかけながらタライに水を入れる。「プールの時、シャワーをしたがなあ」と声をかける。</p> <p>「カメさんは後ろ泳ぎするのは嫌だって言ってるよ」と注意する。</p> <p>C男の様子を見守り、しばらくしてやめるように言う。</p> <p>園外保育で近くのドングリ山へ行く。</p> <p>「たくさん拾ったね。みんなどれくらいあるかな？」と並べてみるようにと誘う。</p> <p>共感する。</p> <p>積み木（30×60×30cm）を横にして段ボール板（90×160cm）を斜めにしておき、子どもが転がせるようにしておく。そのそばにドングリを入れたタライを置く。</p> <p>「どうやって遊ぼうかなあ」と投げかける。</p> <p>見守る。</p> <p>「みんな転ばしたいんだから降りて」と注意する。</p>
11月	<p>C男は「まだしてえ。わあ、あめじゃ」と喜ぶ。また、「きれい」と言う。</p> <p>何も言わず葉っぱを拾っている。</p> <p>「いまごろはテントウムシがおらんったけど、どこにいったんじゃろう」と寂しそうに言う。</p>	<p>園外保育に行く。銀杏の木を揺らして葉を落とす。</p> <p>「葉っぱが雨みたいに降ってきたなあ。きれい」とC男の気持ちを受け止める。</p> <p>M子が見つけたきれいな色を認めたり、銀杏の葉っぱの形を気付かせるように言葉かけをする。W男が見つけた蛾と一緒に見て、「働かないなあ。寝てるんかなあ」と言う。</p> <p>「どこかで寝とるんかもしれないなあ。この蛾みたいに銀杏の葉っぱの下で寝とるかなあ。」と話</p>

3歳児と自然のかかわり（2）

	<p>「イチゴじゃが。あかいけえ」と言う。</p> <p>「くせえ」と顔をそむける。</p> <p>「イチゴじゃが」と言う。</p> <p>保育者の行動をじっと見ている。</p>	<p>す。</p> <p>「これ何と思う？」とS男が見つけた銀杏を子どもたちに見せる。</p> <p>「これ、におってみて」と子どもたちに銀杏をにおわせる。</p> <p>銀杏を拾って園に持ち帰る。</p> <p>降園前、子どもたちを花壇の前に集めて、拾った銀杏を見せながら「今日、これを拾ってきたんで。これなんじゃろう」とみんなに聞かせる。</p> <p>「イチゴやサクランボのにおいかどうかにおってみて」とにおわせる。「銀杏と言って、銀杏の実なんで」と知らせる。そして「土の中に埋めたいら銀杏のにおいが取れてきれいになるんだよ。どこに埋めたか覚えておいてよ」と話しながらスコップで穴を掘り、銀杏を埋める。</p>	<p>「それはなに？」「えきなん？」と言う。</p> <p>「どこにおるん？」と尋ねる。</p> <p>「わあ、すげえ」と言う。</p> <p>「またふくをつくってえよ」とミノムシに声をかける。</p>	<p>てる？」と話しかけ、色紙と毛糸を切ってケースの中に入れる。</p> <p>「何と思う？」と聞きながら、ミノムシは小さい木の枝や発破で自分の服を作ること、ミノムシはこの中で寝ること、この毛糸や色紙は餌ではないことを話す。</p> <p>ミノムシの殻を切って、中の虫を見せる。</p> <p>口が動いているのを確かめて、切った毛糸や色紙が入れてあるケースにミノムシを入れる。</p> <p>「お正月が終わった時、どんな服を着ているか楽しみにしていってね」と言って期待を持たせる。</p>
	<p>C男は「あのブドウはどうなったかなあ」と気にする。</p> <p>C男は保育者の後ろについて歩き、「みんなおいで」と友達を呼ぶ。</p> <p>じっと見ている。「あ！でた」と言う。</p> <p>「たねみたいじゃなあ」と言う。</p> <p>ゴム手袋をつけて「わあくさい」と言いながら手で銀杏をもむ。</p> <p>「どうやってたべるん？」と聞く。</p> <p>「ほうちょうできったらええが」と包丁を取りに行く。</p> <p>じっと見ている。</p> <p>「みせてみせて」と言う。</p> <p>じっと見ている。中から出てきた銀杏を見て「われとるが」とびっくりするとともに、「ええにおいじゃ」と言う。「はやくたべよう」とせがむ。</p> <p>「おいしい？」「せんせいたべてずるい」と言う。</p> <p>手を洗った後、ゆっくり口に入れ「おいしい」「おもちみたい」と言う。</p>	<p>ゴム手袋をして掘る。</p> <p>「見て、こんなになつとるで」としわがよってオレンジ色になっている銀杏を手のひらに載せてみせる。</p> <p>銀杏をミカンネットに入れる。子どもたちにもゴム手袋を用意する。子どもたちと一緒に銀杏をもむ。</p> <p>タライを用意してその中で銀杏を洗おうと声をかける。洗った銀杏を見せて、みんなでたべようと言葉かけをする。</p> <p>「そうじゃなあ。何かいい方法はないかなあ」と子どもたちに投げかける。</p> <p>包丁で切ってみせる。</p> <p>魔法の袋（紙袋）を用意して銀杏を入れる。子どもたちと一緒に給食室へもっていき、レンジにかけてもらう。プーと膨らんだ紙袋を子どもたちに見せる。</p> <p>袋を破ってみせる。</p> <p>テラスに銀杏を持って出て、食べてみせる。</p> <p>手を洗ってくるように言い、一人に一個ずつ銀杏を配る。</p>	<p>C男は、Y男・Z子・R子と一緒に近くに寄って、ケースの中をのぞき、じっとしたままのミノムシを見て「ねとんじやろう。うごかんよ」と言う。</p> <p>C男は「うごいた！おきとる。くちがうごきようる」と言う。</p> <p>木にぶら下がっているのを見て「けいとをチューとすうとるで」と言う。</p> <p>C男は「ぼくんちにミノムシがおるよ。ぼくんちにきて」とみんなを誘い、ミノムシがいる場所を教える。</p> <p>C男は「きにおるんで、みてみ」と保育者や友だちに言う。Y男の「あつた」の声に振り向きながら、C男もミノムシを探す。</p>	<p>ミノムシが裸のままであることを知らせる。</p> <p>ケースからミノムシを出して手のひらにのせてみせる。</p> <p>「動いているのに服を作らんのは、どうしてかなあ」と言いながら木の枝にのせる。</p> <p>「チューとするようになるんじゃないやろかなあ」「糸で家を作るんかなあ」と一緒に考える。</p> <p>「ミノムシが一人じゃさみしいんかなあ。どこかに探しに行こうか」と再びミノムシに誘う。</p> <p>ミノムシがいそうな木を子どもたちに教えながら、C男に「ミノムシはどこにおるかなあ？」と尋ねる。</p> <p>子どもたちがミノムシを喜んでとるを見守る。とったミノムシは、園に持って帰る。</p>
1月		<p>C男は、保育者のところにきて「きょうはおおきいものをもってきたんで」と言ってカバンの中から大きいミノムシを出してみせる。</p> <p>「うちからとってきたんで」と嬉しそうに話す。N男にどこにいたか聞かれ、「ぼくんちのきのところじゃ」と答える。</p> <p>「ぼくがもってきたミノムシがうごきようる？」とケースの中のミノムシを見ながら言う。</p> <p>「つちにうめてやる」と言ってプランターの土の上に置く。C男は以前、テントウムシもこの中に入れてやったことを話し、「ミノムシも入れてやる」と言って埋める。</p>	<p>「何をもってきてくれたん？」「どうしたん？」と尋ねる。</p> <p>ミノムシを見た後、「C男君が自分で見つけて持ってきてくれたの？」と聞き、以前とったミノムシが入っているケースに入れる。</p> <p>ハサミで殻を切って中を見て、ミノムシが死んでいることを伝える。子どもたちに「どうしよう」と相談する。</p> <p>埋めてやっている様子を見守る。</p>	
12月	<p>C男は「どこ？」と言いながら保育者のそばに来る。</p> <p>C男は保育者にミノムシを「ひっぱってみて」と言う。保育者がミノムシを引っ張ってもすぐには離れず、引っついていいることに納得して「ほんとうじゃ」と言う。</p>	<p>ミノムシを見つげに行こうと園外へ誘う。</p> <p>木にぶら下がっているミノムシを見つけて「あ！おるおる」と言う。「これよ。見てごらん」と指さす。この中に虫が入っていることや、冬の間木の枝にしっかりと引っついていいることを話す。</p> <p>園に持ち帰り、ケース（18.5×34×19cm）の中に入れておく。</p> <p>翌日の降園前、ミノムシを見せながら「昨日のミノムシ、覚え</p>	<p>C男は、園庭のツゲの木からミノムシを見つけて「ミノムシがおったよ」と言ってみせる。</p> <p>「あつちのきにおった」と答えた後、すぐに「きらんでする？」と言う。</p> <p>「これでっけえよ。でぶつちよ</p>	<p>三郡保育者研究会で他園の保育士が「ミノムシをそのままに出していたら、中からミノムシが出て新しい殻を作る」と言っていたことを子どもたちに話す。</p> <p>どこにいたのか尋ねる。</p> <p>「うん。みのむしはそのままそっとしてあげよう」とC男の</p>

	<p>のミノムシじゃなあ」と言いながら、大事そうにケースのところへ行き、「いっしょにおいてやろうかなあ」と言って入れる。</p>	<p>持ちを受け入れる。</p> <p>見守る。</p>
3月	<p>C男は「あ！カエルじゃ」と土の中からカエルを見つけ大事に手に持つ。</p> <p>カエルのいた土を指さしながら、「ここで」と場所を知らせるが、その間ずっと手でカエルをなでたりじっと見たりしている。</p> <p>「カエルさん、ねむたい？」とカエルに言うが、保育者の言ったことをすぐには聞こうとせず、カエルを持ち歩く。</p> <p>「うん」と言ってカエルに向かって「まだねる？」と聞く。そして土を掘ってカエルを置き、土をかぶせながら「こうじゃがなあ」と保育者に言う。</p> <p>翌日、またカエルを土の中から掘り出して手に載せている。</p> <p>「うん、そうで。かわいいよ。ちょっときょうはめをあげとるで」と見る。「みてみ」と保育者にも見せる。</p> <p>しばらくしてまた元の土の中に入れる。</p>	<p>プランターの土を入れ替えるため、ひっくり返して土を出す。どこにいたのかを尋ねる。</p> <p>触れられるカエルかどうか心配になり、「春になってきたけど、もう少し土の中で寝たいって言っているよ」と土の中に入れてやるように促し、菜園の場所を知らせる。</p> <p>しばらくして、玉ねぎが植えてある菜園でC男・S男・Y男を見かけ、「今、カエルを寝させているん？」と声をかける。</p> <p>見守る。</p> <p>うなずく。</p> <p>「あれ？昨日のカエル？」と尋ねる。</p> <p>目を開けているカエルの様子を一緒に見る。</p> <p>カエルを土に戻している様子を見守る。</p>